ルドルフ・シュタイナー
「十二感覚論」と
その視点からの
ＡＩと記号接地問題について

CONTENTS

■カール・ケーニヒ『十二感覚の環／七つの生命プロセス』
シュタイナーの感覚論にもとづく治療教育の現場から
（石井秀治訳／耕文舎叢書10　耕文舎＋イザラ書房 2018年春）
～「十二感覚の環」（全体概要）

■シュタイナーの十二感覚論（講義の概略）
GA169『宇宙存在と自我』第3講義（1916年6月20日）
GA199『社会形成の根本衝動の認識としての精神科学』
第3講義（1920年8月8日）
GA206『人間の生成、宇宙魂、宇宙霊
第２部・歴史の生成経過のなかの霊的存在としての人間』
（第1～第3講義、1921年7月22日～7月24日）

「AIと人間について

■大澤真幸「AIと人間」
連載第6回「AIは（人間のように）考えるか」
（『文学界』2026年4月号）
■大澤真幸・松尾豊・今井 むつみ
『生成AI時代の言語論』
(大澤真幸THINKING O 020　左右社　2024/10)

十二感覚の視点からのＡＩと記号接地問題について

■シュタイナーの「十二感覚論」
特に「言語感覚」の視点から見た
AIにおいて問題となる記号接地問題（SGP）

GA 45　第二章
GA169　第三講・第七講
GA170　第七講・第九講

神秘学遊戯団

■カール・ケーニヒ『十二感覚の環／七つの生命プロセス』
　シュタイナーの感覚論にもとづく治療教育の現場から
　（石井秀治訳／耕文舎叢書10　耕文舎＋イザラ書房 2018年春）
　～「十二感覚の環」（全体概要）

カール・ケーニヒ『十二感覚の環／七つの生命プロセス』は
アントロポゾフィー（人智学）の観点から
人間の12の感覚と7つの生命プロセスを探求したもので
1960年7月23日から8月7日に
ニューヨークのスプリング・ヴァレイで行われた8回の講義を基に
1999年にドイツ語で出版されている
（英語版として2006年に拡張・編集されている）

今回はそのなかから
「十二感覚の環」全8回の講義をとりあげる

シュタイナーが「十二感覚」に関して
ある程度まとまった講義が残されているのは
1910年代から1920年代にかけての講義
主に以下のGA 169・GA 199・GA 206だとのこと

GA169『宇宙存在と自我』Weltwesen und Ichheit
全7回の講義（1916年6月6日～7月18日／ベルリン）の
主に第3講義（6月20日）

GA199『社会形成の根本衝動の認識としての精神科学』
Geisteswissenschaft als Erkenntnis
der Grundimpulse des sozialen Lebens
全17回の講義（1920年8月6日～9月11日／ドルナハ）の
主に第3講義（8月8日）

GA206『人間の生成、宇宙魂、宇宙霊
　　第２部・歴史の生成経過のなかの霊的存在としての人間』
Menschenwerden, Weltenseele und Weltengeist. Zweiter Teil
全11回の講義（1921年7月22日～8月20日／ドルナハ）の
主に最初の3つの講義（1921年7月22日～7月24日）

手元にドイツ語原本の講義録はないのだが
英語訳データがネット上で入手できたので
これらの講義の概要については
いずれその内容の概略を確認するとして

ケーニヒの講義もこれらの講義をもとに論じられているので
今回はまずその講義の全体を概観し
追って随時各講義で論じられている感覚のそれぞれについても
見ていくこととしたい

なお本書には
「七つの生命プロセス――イタ・ヴェークマンを偲んで――」

という1960年3月3日・10日・17日に行われ
1999年にドイツ語で出版され
英語版として2006年に拡張・編集された
3回の講演もあわせて収録されている

この生命プロセスについてのシュタイナーの講義は
ケーニヒによれば
GA45『Anthroposophie, Ein Fragment aus dem Jahre』の中で
語られている「7つの生命プロセス」を中心に
GA115『Anthroposophie-Psycholosophie-Pneumatosophie』
1910年のベルリンの講義や
GA 170『Das Rätsel des Menschen.
Die geistigen Hintergründe der menschlichen Geschichte』
の第8講義（1916年8月12日・ドルナハ）が
参照されているようなので
その概要についてもいずれ確認することにして

それらの講義をもとにしながら論じられた
ケーニヒの講義に関しても
十二感覚をとりあげた後に随時とりあげたい

さてまずは十二感覚の概要について

ケーニヒはシュタイナーの講義内容に基づき
人間には通常論じられる五感である
視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚だけでなく
合計12の感覚があるとしている

これらは「感覚の円」として
以下の下位感覚・中位感覚・上位感覚として
円環状に配置される

主に身体と自己の内面的な状態に関わり
幼児期に発達する
「下位の感覚」である
触覚・生命感覚・運動感覚・平衡感覚

外部世界の質を感知し
幼児期から児童期に発達する
「中位の感覚」である
嗅覚・味覚・視覚・熱感覚

社会的・精神的な他者を感知し
青年期以降に発達する
「上位の感覚」である
聴覚・言葉感覚・思考感覚

わたしたちはこうした三つの感覚領域によって
霊・魂・体として完全に三分節化されている存在で

上位感覚を通して互いにつながり
中位感覚を通して世界を知り
下位感覚を通して私たち自身の身体を体験する

なおケーニヒは最初の講義（1960年7月23日）において
こう語っている

十二感覚の環は、
わたしたち人間の成長とともに発達していきます。
十二の感覚はすべて一緒に作用しています。
しかしそれらは同時に、それぞれ別のものです。
下位ー、中位ー、上位感覚領域から各々ひとつの三つの感覚、
たとえば触覚、嗅覚、聴覚は、とりわけ密接につながっています。

なお1963年10月14日から18日にウィーンで行われた
「十二感覚に関して行われたゼミナールからの抜粋」では
霊・魂・体と
物質体・エーテル体・アストラル体・自我との関係で
上記の諸感覚の相互関係が
以下のような一定の配置として論じられている

霊 魂 身体

物質体 聴覚 嗅覚 触覚
エーテル体 言語感覚 味覚 生命感覚
アストラル体 思考感覚 視覚 運動感覚
自我 自我感覚 熱感覚 平衡感覚

触覚・嗅覚・聴覚が密接につながっているように
言語感覚・味覚・生命感覚
思考感覚・視覚・運動感覚
自我感覚・熱感覚・平衡感覚もまた
それぞれ物質体・エーテル体・アストラル体・自我において
密接につながっているのである

■シュタイナーの十二感覚論（講義の概略）
GA169『宇宙存在と自我』第3講義（1916年6月20日）
GA199『社会形成の根本衝動の認識としての精神科学』
第3講義（1920年8月8日）
GA206『人間の生成、宇宙魂、宇宙霊
第２部・歴史の生成経過のなかの霊的存在としての人間』
（第1～第3講義、1921年7月22日～7月24日）

mediopos4063(2026.1.3）では
カール・ケーニヒ『十二感覚の環／七つの生命プロセス』から
十二感覚の環についての概略を紹介した

シュタイナーはGA115『人智学・心智学・霊智学』
（Anthroposophie - Psychosophie - Pneumatosophie）に収められた
連続講義「人智学」（1909年10月23日-10月27日、ベルリン）でも
生命感覚・運動感覚・平衡感覚・嗅覚・味覚・視覚・熱感覚・
聴覚・言語感覚・概念感覚という十感覚について論じているものの
この時点ではまだ十二感覚としては論じられていない
（邦訳は『人智学・心智学・霊智学』（ちくま文庫））

「十二感覚」に関して
ある程度まとまった内容が語られている講義は
前回ふれたように以下のGA 169・GA 199・GA 206である

ケーニヒの講義をとりあげるまえに
今回はシュタイナーの講義で論じられている
十二感覚の概略をみておくことにする

まず
GA169『宇宙存在と自我』第3講義（1916年6月20日）
※ちなみにこの講義の最初に
前日に亡くなったモルトケ卿への弔辞が捧げられている

この講義では人間には12の感覚

Tastsinn（触覚）/Lebenssinn（生命感覚）/Bewegungssinn（運動感覚）
Gleichgewichtssinn（平衡感覚）/Geruchssinn（嗅覚）
Geschmackssinn（味覚）/Sehsinn（視覚）/Wärmesinn（熱感覚）
Gehörsinn（聴覚）/Sprachsinn（言語感覚）
Denksinn / Begriffssinn（思考/概念感覚）/Ichsinn（自我感覚）

があるとし

これらを黄道十二宮と対応させ
魂の生活がこれら12感覚の円周を
太陽が黄道を巡るように動くことを比喩的に説明している

また自我感覚（Ichsinn）が他者の「我」を感知するものであることや
魂と感覚の関係や死と再生の文脈での感覚の役割などについても

語られている

続いて
GA199『社会形成の根本衝動の認識としての精神科学』
第3講義（1920年8月8日）

この講義でも感覚組織を完全に理解するためには
12の感覚を考慮する必要があると強調
これらをImagination（イマジネーション認識）
Inspiration（インスピレーション認識）
Intuition（イントゥイション認識）との関係でとらえている

またここでは前回ケーニヒでの説明でもとりあげたように

意志に関連した身体的な下位の4つの感覚
（触覚・生命感覚・運動感覚・平衡感覚）

感情に関連した魂的な中位の4つの感覚
（嗅覚・味覚・視覚・熱感覚）

思考に関連した精神的な上位の4つの感覚
（聴覚・言語感覚・思考感覚・自我感覚）

について論じられている

そして
GA206『人間の生成、宇宙魂、宇宙霊
第２部・歴史の生成経過のなかの霊的存在としての人間』
最初の3つの講義（1921年7月22日〜7月24日）

第1講義では

十二感覚の全体像を示唆し
人間は十二の感覚を通じ外界を知りつつ内的な魂生活を築き
宇宙的存在としても存在していること

そして「上部の人」
（高次の感覚／自我・思考・言葉・聴覚・熱感覚・視覚）と
「下部の人」
（低次の感覚／味覚・嗅覚・衡・運動・生命・触覚）に分け

上部は本質的な魂生活を形成し
下部は外的な経験に似た内的なプロセスであることが
論じられる

第2講義では

第1講義の高次の感覚と低次の感覚をふまえ
高次の感覚は魂生活の基盤であり

責任・道徳の世界とつながり
低次の感覚は自然必然の世界とつながり
客観的な身体プロセスを伝えるが

現代ではこの二つの極の間に深い断絶が生じていて
道徳的必然（信仰）と自然的必然（科学）が分離され
魂生活は知的・物質的に貧困化していることが論じられる

第3講義では

上部の高次の感覚と下部の低次な感覚の断絶が
とくに記憶と愛の能力ににも現れるが
現代の課題は魂霊的と肉体物理的の統合・バランスにあり
これなくしては文明の再生は不可能であることが示唆される

以下はそれぞれの講義からの拙訳（意訳）

GA169『宇宙存在と自我』から

「大宇宙では、太陽が一年の間に十二の黄道十二宮を通ります。そして人間の「自我」は、物質界において十二の感覚の中に生きています。確かに大宇宙では、特に時間の順序に関して、かなり異なっています。太陽は牡羊座から牡牛座を通り、そしてまた魚座を通って牡羊座に戻ります。われわれの中にあるものすべて、魂で経験するものすべては、十二の感覚を通して外の世界と関係しています。それが触覚、生命感覚、運動感覚、平衡感覚、嗅覚、味覚、視覚、熱感覚、聴覚、言語感覚、思考感覚、そして自我感覚です。

れわれの内的な生活は、太陽が黄道十二宮の円を通るように、この十二の感覚の円を通ります。しかし、この外的な類推をさらに進めていくことができます。一年の間に、太陽は牡羊座から天秤座までのすべての宮を通らなければなりません。昼間は上位の宮を通り、夜は下位の宮を通ります。太陽の下位の宮を通ることは、外的な光からは隠されています。魂の生活と十二の感覚についても同じです。十二のうち半分は昼の感覚であり、黄道十二宮の半分が昼の宮であるようにです。残りは夜の感覚です。」

「魂はこれらの十二の感覚に対して、太陽が黄道十二宮に対して持つと同じ関係にあります。これによって、人間が真の意味で小宇宙であることがおわかりいただけるでしょう。現代科学はこれらのことを完全に無知です。聴覚を認めながら、言語感覚の存在を否定します。聴覚だけでは、言葉の高い意味を理解することはできません。理解するためには、言葉に表現された意味に対する感覚、言語感覚が必要です。この言語感覚を思考感覚と混同してはなりませんし、思考感覚を自我感覚と同一視してもなりません。」

「われわれが十二の黄道宮を通るように人生を進むということは、まさに真実です。地上の生活を始めるとき、感覚に対する意識は、言わば世界の柱の一つで昇り、もう一つの柱で沈みます。星々の天を進むように、夜側から昼側へ移るとき、これらの柱を通ります。秘教的・象徴的な結社は常にこれを示そうとして、出産の柱、昼側の生活へ入る途中で通る柱を「ヤキン」と呼んできました。」

「ヤキンを通って地上生活に入るとき、外にあるものが今やわれわれの中に生きていること、われわれが小宇宙であることを確信します。ヤキンという言葉は「世界に注がれた神的なものがあなたの中にある」という意味です。もう一つの柱、ボアズは、死を通して霊界への入口です。ボアズに含まれるのは大まかに次のことです。「これまで私が自分の中に求めていた力、つまり強さを、今や全世界に注がれているのを見出すでしょう。そこで私は生きるのです」。しかし、このようなことは、精神的な認識によってのみ理解できます。象徴的な兄弟団では、柱は象徴的に語られます。第五ポスト・アトランティス時代である現在、これらがよ

りしばしば言及され、人類がこれらを完全に失わないようにし、後世がこれらの言葉に保存されたものを理解する助けとなるでしょう。」

GA199『社会形成の根本衝動の認識としての精神科学』から

「人間が通常の感覚知から高次の認識へ進むとき、魂霊的部分が肉体から抜け出します。そうするとイマジネーション認識・インスピレーション認識・イントゥイション認識という高い認識形態が現れます。」

「この感覚の分類から、高次の世界の知覚を特別に特徴づけることができます。私たちは自分自身から抜け出しますが、どの境界を越えるのでしょうか。内側に留まるとき、感覚が境界となります。外側へ抜け出すとき、私たちは感覚を通じて外へ浸透します。特に視覚器官を通じて肉体を離れると、想像力の領域に到達します。魂の目で見るとき、純粋な絵画的な想像像（虹のような純粋な像）が織りなされます。
味覚器官を通じて抜け出すと、物質の最後の残滓が混じった像になります。幽霊的なものに近づきます。
熱感覚を通じて抜け出すと、魂に温かさや冷たさの感情を与える像になります。
聴覚を通じて抜け出すとインスピレーション認識の領域に入ります。インスピレーション認識はイマジネーション認識よりもインスピレーション認識の内側に深く属します。空気を吸い込むように、魂がインスピレーションで満たされるのです。
言語感覚を通じて抜け出すと、インスピレーション認識が他者との一体感で色づきます。
思考感覚を通じて抜け出すとイントゥイション認識の領域に入ります。
自我感覚を通じて抜け出すと、イントゥイション認識が霊的な外世界の本質で色づきます。
こうして、私たちは魂と霊で肉体を離れるほど、霊的な外世界の本質に浸透します。すべてが霊的世界であることに気づきます。しかし、人間は霊的世界から押し出されています。感覚の向こう側にあるものは、魂と霊で肉体を離れて初めて知覚されますが、それは感覚によって形づくられます。
内側の感覚（嗅覚・触覚・平衡感覚・運動感覚・生命感覚）を通じて内側へ浸透するときは、まったく異なります。これらの感覚は日常では無意識です。知覚されるのは魂へ放射されたものだけで
生命感覚は、健康なときの心地よい全体的な幸福感として魂に放射されます。痛みで乱されるときだけ気づきます。
運動感覚は、筋肉の伸縮を通じて自由な魂の体験として魂に流れ込みます。自分が自由な魂として感じられるのは、この感覚の効果です。
平衡感覚は、内的な静けさとして魂に流れ込みます。体の中の存在を時間的に独立したものとして感じ、霊として自分自身を経験します。
触覚は、外側へ完全に投影されます。硬さ・柔らかさ・粗さ・滑らかさを物体に帰属させますが、内側では神の感覚による浸透として魂に放射されます。触覚がなければ、神の感覚はありません。触覚を通じて、外世界の存在を確信し、万物を貫く神的な普遍的実体を感じます。
嗅覚は外側へ放射されますが、内側へは神との神秘的一体感として流れ込みます。嗅覚の効果が魂の内側に深く入り込むと、神との合一として経験されます。」

GA206『人間の生成、宇宙魂、宇宙霊
第２部・歴史の生成経過のなかの霊的存在としての人間』

・第1講義から

「重要なのは、人間の中で主観的なもの、内的な魂生活と、実際には眠っている領域を区別することです。人間はそこでは、感覚が伝えるものすべてに対して宇宙的存在にほかなりません。普通の魂生活では、高次の視力がなければ腕を動かすとき何が起こっているかわかりません。それは意志活動です。それは他の外的なプロセスと同じく、あなたの外にあるプロセスです。一方、意識が伴わない観念や心像はありません。
この三つの領域を区別すると、さらに別のことがわかります。自我感覚・思考感覚・言語感覚・聴覚が伝えるものは、主に観念と結びついています。

熱感覚・視覚・味覚・嗅覚に関わるものは感情です。視覚については一見では明らかではありませんが、よく見れば味覚・嗅覚・熱感覚と同じく感情に関わります。

平衡感覚・運動感覚・生命感覚・触覚（触覚は内側に退くので見えにくいのですが）は意志と結びついています。人間生活ではすべてがつながりながら、すべてが変容します。」

・第2講義から

「昨日、私は人間の上部（高次の感覚）と下部（低次の感覚）の区別を説明し、上部が本質的な魂生活を構成し、下部は外的な経験に似た内的なプロセスであることをお話ししました。自我感覚、思考感覚、言語感覚、聴覚、熱感覚、視覚は前者で、味覚・嗅覚と、さらに内的な四つの感覚（平衡・運動・生命・触覚）は後者に属します。

このような区別を明確にすると、外界を記述する粗雑な言葉では人間の本質や内的な世界構造を十分に表現できないことがわかります。しかし、上部と下部の人間がどちらも世界プロセスを表していることを理解すれば、私たちの経験には明確な二極性があり、一方の極との関係は他方の極とはまったく異なることがわかります。

この人間の二分性を徹底的に把握しなければ、現代と近い未来における最も重要な問題――高次の本性で生き、責任を持つ私たちの道徳的世界と、自然必然の世界との関係――について、決して明確な理解には到達できません。

最近の数世紀、特に15世紀半ば以降、人類の進歩は主に自然的必然という考えを発展させることにあり、道徳的な極への注意は相対的に少なくなりました。時代の徴を読むことができ、時代の課題を知る人は、道徳的必然と自然的必然の間に深い断絶があることをはっきりと認識しています。

この断絶が生じた主な理由は、現代の精神生活を代表すると信じる多くの人々が、科学・知識で把握できる領域と、信仰だけで把握できる領域を区別しているからです。厳密な自然法則に当てはまるものだけが本当に科学的であり、道徳生活の領域については信仰の確実性だけを主張するという考えが広まっています。この区別を必要とする理論がさまざまに展開されています。」

・第3講義から

「有機的な生命は、霊的な形成において理解されなければなりません。頭部は超感覚から、前回の地上生活の変容で形成され、残りは今生の世界から加わりますが、それもまた霊的なものです。

記憶の誕生と成長の力の関係を把握すれば、物質と7～8歳以降の魂と霊の生活の相互作用がわかります。幼児期の成長の源である力が、後に記憶力として現れます。

愛の能力は正反対です。身体性に結びつきながら、最も魂的なのです。記憶と愛は霊的と肉体的の相互作用を経験でき、人間と世界の関係全体と結びつきます。

記憶は前回の地上生活と結びつき、愛は今生で発達し、死と新生の間を通って次回に移行します。

今日、人間は魂と霊における道徳と肉体物理的な自然必然の間に橋を架けなければなりません。道徳は自由を、自然は必然を前提とします。必然がなければ科学はなく、自由がなければ道徳はありません。両者の矛盾は論理的なものではなく生活の矛盾にほかなりません。私たちは常に外部の自然と対立しながら生き、無力に感じています。

この矛盾は悲劇的なものですが、文明人類が何世紀も知性主義・抽象に絡め取られた結果です。知性主義は「自由は観念の中だけにある」とし、その無力さを主張します。

しかし、私たちは本当に無力なのでしょうか。生命には上昇だけでなく下降があり、知的生命は死の力・崩壊の力と結びついています。知性を発達させるためには死が必要です。炭素など元素がタンパク質を形成するとき、混沌となります。これらの研究はすべて、理論的矛盾ではなく、人間本性の現実のプロセス――自然因果を溶解するプロセス――を示します。

人間の生命は自然の因果に対する闘いです。この闘いの表現が「私は自由だ」という意識なのです。」

■大澤真幸「AIと人間」
　連載第6回「AIは（人間のように）考えるか」
　（『文学界』2026年4月号）
■大澤真幸・松尾豊・今井 むつみ
　『生成AI時代の言語論』
　(大澤真幸THINKING O 020　左右社　2024/10)

大澤真幸の『文学界』誌上での連載
「AIと人間」第6回で主題となっているのは、
主に「記号接地」
（Symbol Grounding Problem/SGP）をめぐる問い、
「言葉と表象の対応」を超えた、
「記号と現実の対応」を問う問題である。

大規模言語モデル（Large Language Model,LLM）において、
LLMが「考える」ということをどうとらえるかなのだが、

ここでは大澤真幸が「AIは意識をもっているか、
AIはいずれ意識をもつことになるか、といった、
不毛な水掛け論になりがちな問いを主題化するつもりはない」
と言っているように、その問題は外し、

「AIがある意味では考えている、ということは認めるとして、
AIは、われわれと同じように、つまり、
人間と同じように考えることができるのか？
あるいは、仮に現在のAIは、人間のようには考えていないとしても、
将来のAIは、人間のように考えるようになるのだろうか？」
という問いにおいて、

「人間の思考の働きは、AIとどう同じでどう異なるのか？
AIを鏡のように活用することで、
人間の知性の本質的な特徴を浮かび上がらせること」が
目標として設定されている。

LLMの基本的な仕組みからすれば、明らかなのは、
それは「人間が考え、何ごとかを理解する方法とは、
まったく違う」ということである。

人間にとって、言語化されたことを「分かる」というのは、
「単語＝記号とそれらの列が、外的な実在（･･･）と
対応していることを理解することである」。

LLMは「りんごを一度も見たことがなく、食べたこともないのに、
りんごについて語らせれば、適切なことを言う」ように、
「単語の並び方だけで訓練されているのに、
世界についておおむね理解しているように見える」けれど、
人間のように思考しているわけではない。

そのことについて検討するためには、

ジョン・サールが1980年の論文で提起した
「中国語の部屋」という思考実験と
認知科学者のスティーヴン・ハルナッドが
1990年の論文で提起し定式化した
「記号接地問題」を見てみる必要がある。

「中国語の部屋」の思考実験とは、
部屋の中に閉じ込められた人が、
中国語の記号をルールブック（構文だけ）で操作して
完璧に返答するが、本人は中国語を全く理解していない。
これがAIの記号処理そのもので、
構文操作 ≠ 意味理解を証明したものである。

1980年の時点でLLMの問題は想定されていないが、
これを時代を先取りした隠喩とみなすことができる。

解答が適切なものと見えたとしても、
解答者は質問も回答も理解してはいないのである。

また「記号接地問題」を提起したハルナッドによれば、
AIは記号を記号に関係づけ、
記号を別の記号に置き換えていくが、
その記号は全く外的な対象とは結びついていない。
このことをハルナッドは、
「記号から記号へのメリーゴーランド」と表現している。

いうまでもなく、人間には
AIのような「記号接地問題」は解決されている。

ちなみに、「りんご」という記号も、
視覚や聴覚がとらえる表象であって、
「記号接地」とみなされている操作は、
シニフィアンとしての記号の表象機能と
シニフィエとしての意味の表象機能のあいだの対応であって、
こうした「記号接地」であればAIでも実現可能なのだが、

「そのAIでも、なお、人間が言語を通じて実行しているような
記号接地の能力を持つことはない」
「言語において実現している記号接地」は、
上記のような二種類の表象を対応させるような意味での
「記号接地」とは異なっている。

「人間が言語とともに獲得する記号接地の能力は、
実にふしぎな、神秘的とさえ言いたくなるようなことだ」
と大澤は示唆し、
そのことを示す実験が紹介されている。

この実験の被験者は人間ではなく
「アイ」という名のチンパンジーで、

実験者は霊聴人類学者の松沢哲郎。

松沢たちは、「アイ・プロジェクト」として、
アイに「言語」を学習させる実験をおこない、
アイに色の名前を学習させた。

アイに教えられたことばは、幾何学図形である図形文字。
それが採用されたのは、シニフィアン（記号）と
シニフィエ（意味）との対応の「恣意性」を確保するためで、
図形文字（シニフィアン）がそれに対応する色（シニフィエ）を
連想させる有縁性をもたないように配慮された。

アイに対し、「色を見て、図形文字を選ぶ」
という訓練がなされ、
色を意味する図形を理解しているかのような水準に達し、
色を見せると、正しい図形文字を選べるようになったのだが、

アイに図形文字を提示して、
「これはどの色ですか」と選ばせてみたところ、
アイはまったくできなかった。
「アイは、本質的に「わかっていない」」ことが
明らかになったのである。

このアイの失敗は、
「われわれが普段気付いていない、言語の本質を。
言語における記号接地とは何かということを照らし出している」。

アイが学習したのは〈色→文字〉という順序の対応、
つまり〈意味Meaning→記号Sign〉という対応であり、
逆の〈文字→色〉、〈記号Sign→意味Meaning〉
という対応はできなかった。

もちろん、その後その逆の対応の条件づけの学習をさせれば、
それは可能になるのだが、
そのように二回に分けて習得されなければならないとしたら、
それは言語とはいえない。

人間の言語の表象作用の学習では、
〈M→S〉と〈S→M〉は別のことではなく。
同一のことなのである。
しかしアイの実験では、別のことでしかなかった。

このアイと同じことを高速でやっているのがAIである。

つまり、AIとは異なって、
人間の言語における記号接地は
「MとSの二つの表象を対応させ、結びつけることではない」

「ならば、記号接地とはどんな事態なのか？」

そう大澤は問いかけている。

こうした記号接地をめぐる問いは
「人はいかにして現実（実在）を知ることができるのか？」
といい大問題と直接関連している。

「現実（実在）」とは、
「心の外に、それ自体として存在しているもののこと」であり、
「記号接地の本来の意味は、
「ことば（記号）と「心の外の実在」とが対応していること」
である。

その意味において、
記号接地は「ことばと表象の対応」とは別のものだといえる。

記事はそのことを確認するところで終わっているのだが、
（まるで、連続ドラマの「続く」のよう）
こうした「記号接地」の問題については、
大澤真幸・松尾豊・今井 むつみによる
『生成AI時代の言語論』（左右社　2024/10)が
参考図書として挙げられているのだが、

「記号接地問題」は、どちらにせよ、
「言葉と表象の内部対応とは別の、現実との対応問題」であり、
それは単なるAI工学の問題ではなく、
人間の認識の根本（現実知の可能性）に迫る哲学的問いになる。

「接地」とは「心が世界に降り立つ」プロセスであり、
そこにこそ「私たちは本当に現実を知っていると言えるのか」
という問いへの答えのヒントがあるといえるのだが、
通常の哲学的な問いではその糸口がみえそうもない。

そこで、この問題について、
ルドルフ・シュタイナーの「言語感覚」を含む
十二感覚の問題と関係させながら追って考えてみたい。
（シュタイナーに関するノートでこの問題をとりあげる）

■シュタイナーの「十二感覚論」
　特に「言語感覚」の視点から見た
　AIにおいて問題となる記号接地問題（SGP）

・GA 45　第二章
・GA169　第三講・第七講
・GA170　第七講・第九講

mediopos4146(2026.3.18）において、
AIと記号接地問題についてとりあげたが、
ここでは記号接地問題を
シュタイナーの十二感覚論（特に言語感覚）との関係で考える。

これは、記号接地問題（Symbol Grounding Problem/SGP）を提起した
スティーヴン・ハルナッドの
記号が他の記号だけで循環せず、現実／世界に「接地」される必要性と、
シュタイナーの人智学が描く「多層的な人間知覚」の出会いとして解釈できる。

SGPの核心にあるのは、
記号は「現実の一部」と直接結びつくことで初めて意味が生まれる、
というものであり、
その「接地」に関して ハルナッドは、
「非記号的で感覚運動的な底上げ（bottom-up grounding）」によって
解決すると提案していて、
これはまさに身体を通じた世界との因果的・相互作用的なつながりである。

私たちは感覚・運動経験（触る、動く、見る）によって、
「椅子」という記号を現実の多様な物体に接地させることで、
「現実を知る」ことができる。

しかし純粋記号系であり
「記号のメリーゴーラウンド」であるAIには、この接地が欠如していて、
現実そのものにアクセスすることができない。

SGPは、世界は存在し、私たちは身体でそれにアクセスできる
という実在論的立場を前提にしていて、
それはカント的な物自体が認識できないとする立場を
超えられない限り、その前提が成立しないのだが、

まさに「心が世界に降り立つ」プロセスである「接地」が、
人間の認識の根本（現実知の可能性）に迫る哲学的な問いになる。

それが、mediopos4146(2026.3.18）でとりあげた、
大澤真幸の問いであると思われる。

シュタイナーは五感を超えた十二感覚を提唱し、
人間が世界を認識する仕組みを階層的に説明しているが、
ここでは、言語感覚が記号接地問題の
「記号→意味」の橋渡し役として機能する点を鍵としてとらえたい。

シュタイナーの十二感覚は
触覚・生命感覚・運動感覚・平衡感覚
嗅覚・味覚・視覚・熱感覚・
聴覚・言語感覚・思考感覚・自我感覚だが、

下位の感覚である触覚から熱感覚までが
記号を物理的現実にむすぶものであり、
上位の感覚である言語感覚から自我感覚が
言葉そのものの意味・魂の響きを直接知覚する専用感覚である。

SGPで問題になる「記号のメリーゴーラウンド（記号どうしの循環）」は、
下位感覚で物理的なものに接地された上で、
言語感覚が記号に内在的な意味を注入することで突破される。

シュタイナーは「言葉を聞くとき、単なる音ではなく
『もっと内面的なもの』が知覚される」と述べ（GA 45）、
これは判断以前の即時的な「感覚」だとしている。

つまり、記号（言葉）は下の位感覚→上位の感覚の階層を通じ、
物理的現実だけでなく「魂・精神の現実」に接地されるのであって、
AIの純粋記号系（LLMなど）が欠くのは、
まさにこの上位感覚の階層である。

さてシュタイナーのいう言語感覚（Sprachsinn）は、
他者の言葉を理解するための専用器官であり、
発話能力とは別物の「他者が話す言葉を理解する感覚」である。

その器官は「運動器官」と結びつき、言葉を聞くときに
「潜在的な運動を抑える」ことで意味を捉えるのであって、
聴覚（音）とは明確に区別され、
ジェスチャーや文字（書字）にも拡張される。

こうした感覚論によって、
言語感覚は記号（言葉）を「魂の現れ」として即時的に知覚するため、
意味が「人間の解釈依存」ではなく内在的なものになる。

そうとらえることで、
「人はいかにして現実を知るか」という問いは、
十二感覚全体の統合によって答えることができる。
つまり、記号は物質界（下位感覚）から精神界（上位感覚）まで
連続的に接地され、断絶することはない。

先にSGPは実在論的立場を前提にしているといったが、
シュタイナーの視点によれば、
接地は多層的・霊的な様態であって、
記号（言葉）は言語感覚を通じ、
「他者の自我」や「思考の生き生きした本質」に結びつき、
単なる物理的な相関を超えた

「真の現実（物自体に近い精神的内容）」を知ることになる。

この視点によって、SGPの「心の外の現実を知る」という難問は、
十二感覚の発達（特に思春期以降の上位感覚）が、
人間を「世界の自己知覚」へと導くものとなり、
感覚は「世界が自分自身を体験する道具」としてとらえることができる。

つまりAIの展開によるロボット身体＋マルチモーダルにおいても、
上位感覚（霊的・社会的次元）の模倣が必要になるが。
それは人間的な「魂の発達」を要求するものとなるのである。

以上の観点をまとめると、
記号接地問題を十二感覚（特に言語感覚）と結んでとらえると、
「記号は身体・魂・精神の連続体を通じて世界に根づく」
という全体論的解答が生まれ、
ハルナッドの身体性重視をさらに「霊的次元」まで拡張、
「人はいかにして現実を知るか」を
多感覚的・発達的・超感覚的に再定義する視点が得られる。

以下、上記の視点において示唆的な講義内容から（意訳）。

●GA 45（『Anthroposophie. Ein Fragment』第二章）

「言語において音によって現れるものを知覚するとき（･･･）、話されたものを知覚するには複雑な判断行為が関与し、「感覚」という言葉で記述できない広範な魂の過程が働きます。しかし、この領域にも、判断以前の単純で直接的な何か――色や熱の度合いと同じような感覚――が存在します。
　音は高さだけでなく、それ以上に内的なものを捉えます。物体の魂が音の中に生きていると言うならば、音においてこの魂的生活が、物質から解放され、ある独立性をもって現れると言うこともできます。音の感覚が判断に先行するため、子どもは判断を使えるようになる前に、言葉の音の意味を感じ取ることを学びます。子どもは言語を通じて判断することを学びます。
　音の感覚あるいは言語感覚と特別に呼ぶのは完全に正当です。この感覚を認識するのが難しいのは、音に現れる直接的な感覚に加えて、さまざまな判断の行使が通常行われるからです。しかし、自分を注意深く観察すれば、音に与えられるものを聞くことはすべて、色印象を知覚する場合と同じように、音を発する存在に対する直接的で判断を伴わない関係に基づいていることがわかります。この事実を把握しやすいのは、痛みの音が、反省などを介さずに直接的に存在の痛みを体験させる場合を思い浮かべることです。聞こえる音だけがこのような内面性を人に明らかにするものではないことを考慮することが重要です。身振り、表情、相貌も、最終的には言語の意味の一部として、聞こえる音の内容と同じく単純で直接的なものに導きます。」

●GA169　第三講（1916年6月20日）

「私たちが持つすべて、魂で経験するすべてさえも、十二の感覚を通じて外界と関係しています。これらは、生命感覚、運動感覚、平衡感覚、嗅覚、味覚、視覚、熱感覚、聴覚、言語感覚、思考感覚、そして自我感覚です。私たちの内なる生活は、十二の感覚の円を通り、太陽が黄道帯の十二星座の円を通り抜けるのと同様に動きます。」

「一年の間に、太陽は牡羊座から天秤座まで、すべての星座を移動しなければなりません。日中は上位の星座を、夜は下位の星座を通過します。太陽がこれらの低い星座を通過することは、外部の光から隠されています。それは私たちの魂の生命と十二の感覚においても同様です。十二星座の半分は昼の感覚であり、黄道帯の星座の半分は昼の星座であり、残りは夜の感覚です。」

「現代の科学はこれらの事柄について全く無知であり、聴覚は認めつつも、発話の感覚の存在を否定していますが、聴覚だけでは発話の高次の意味を理解することは決してできません。理解するためには、言語感覚、すなわち言葉に表現された意味の感覚が必要です。この発話感覚は思考感覚と混同すべきではなく、思考感覚は自我感覚と同じではありません。」

●GA169　第七講（1916年7月18日）

「言語感覚はここで他者の言葉を通じて「他者の自我」を知覚する器官として機能し、記号接地問題との接続で言うと、言葉が単なる記号ではなく、魂・精神の現れとして内在的に接地されるプロセスを表します。」

●GA170　第七講（1916年8月12日）

「言葉の知覚が音の知覚と同じだと考えるのは、無意味です。二つは、味覚や視覚と同様に、互いに異なっています。確かに、音は対象の内面的な世界を私たちの知覚に開きますが、これらの音は意味のある言葉になる前に、はるかに内面的になる必要があります。したがって、聴覚を通じて音を知覚することから、言葉の感覚を通じて意味を知覚することへと進むとき、世界へのより深い親密さへの一歩となります。しかしながら、単なる言葉を知覚するとき、私は対象や外部のものと、言葉の背後にある思考を知覚したときほど、外部のものと深く結びついているわけではありません。この段階では、ほとんどの人が区別をしなくなります。しかし、単に言葉を知覚することと、実際にその言葉の背後にある思考を知覚することには区別があります。結局のところ、蓄音機――あるいは文字に関しては――がそれらを思考者から切り離しているときでも、まだ言葉を知覚することができます。しかし、通常の言葉の感覚よりも深い感覚が機能し、言葉を形成している存在と生きた関係を築く前に、言葉を通じて入り、思考を行い概念を形成する存在に自らを直接移すことはできません。そのさらなる一歩は、私が思考感覚と呼びたい感覚を要請します。そして、思考感覚よりも外的世界に対する、さらに親密な感覚を与える別の感覚があります。それは、他の存在を自分自身として感じさせ、他の存在と一体になる際に自分自身を自覚できるようにする感覚です。それは、思考や生きた思考を他者の存在へと向けた場合に起こることです。生きた思考を通じて、この存在の「私」すなわち「自我」の感覚を見ることができます。

●GA170　第九講（1916年8月15日）

「私たちが、何かがどのように見えるか、あるいはどのように起こったかを指示する説明を読むとき、私たちは発話感覚、すなわち言語感覚を用います。それを通じて、私たちはある事柄と別の事柄について情報を得ることができます。しかし、詩を単純な情報を聞くのと同じように聞くと、私たちはそれを理解することができません。詩は当然ながら発話の感覚に現れますが、発話の感覚だけでは理解できません。言語感覚に加えて、調和されたバランスと動きの感覚も詩に焦点を当てなければなりません――単に通常の平衡や運動の感覚だけでなく、調和された感覚です。それで、感覚が再び融合するのがわかります。感覚の領域は生命領域となり、感覚器官は結合して機能しています。さらに、この全過程は、物理的な世界における通常の生命過程のように機能するのではなく、魂に関わる生命過程を伴う必要があります。」